Vol. 115, No. 10 December 2018　　題字　一萬田 尚登 第５代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 115 年）

史上初めての日米印首脳会談
トランプ大統領を中心に向かって左に安倍首相と右にモディ首相
（インド首相府ホームページより）

目次

1. モディ首相の公式来日に伴った外務省南部アジア部 滝崎部長講演会 ･････････････ P. 3
2. 精神的な絆から「特別戦略的・グローバル・パートナーシップ」へ
—日印関係の将来をインドで語る— ････････ P. 4
3. アッサム州の舞踏団を迎えて ･･･ P. 8
4. インドニュース（2018 年 11 月） ･･･ P. 10
5. イベント紹介 ･･･ P. 13
6. 新刊書紹介 ･･･ P. 14
7. 掲示板 ･･･ P. 15

1. モディ首相の公式来日に伴った
外務省南部アジア部 滝崎部長講演会
Visit of Prime Minister Modi to Japan

2018 年 10 月 27、28、29 日に訪日されたインド・モディ首相の受入れ側の実質的な責任者であった外務省南部アジア部の滝崎成樹部長を迎えて、日印協会は、11 月 27 日（火）法曹会館で講演会を開催した。

首脳会談をはじめとする訪日の意義と成果については、『月刊インド』11 月号の平林日印協会理事長によるまとめを参照願いたいが、講演では当事者としての感想や裏話の一端が、要旨下記の通り披露された。

- 事務方トップとしてモディ首相を迎えるに当たり日印関係に関するインド国民へのアピールと日本技術の優位性をいかに効果的に演出するという事に腐心した。特に日本らしさを醸し出す場所として富士山の麓で安倍総理の別荘などでの歓迎や世界的に有名なファナック工場の視察を組み合わせたことは、結果的には大成功と評価する。
- 政府間の合意事項については、多くの点で進展があった。特に、金融危機における対インド外貨救済を目的とした通貨スワップ協定の署名、双方の外交・防衛当局の協議（2+2 会合）の次官級から閣僚級会合への引き上げ、インド北東部を中心とした開発援助へのコミットメント、ムンバイ・アーメダバード間の新幹線式高速鉄道の計画促進へのコミットメント（土地収用問題で若干遅れ気味）など、広範囲な協力体制の推進で合意がなされた。さらに、人的交流のための日本語教育の進展や 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック絡みでスポーツ交流についての協力強化が確認された。
- 対中国外交については、昨年までは印中間は聊か険悪な状況ではあった。本年にモディ首相が 2 度に亘って中国を訪問し相当の進展があったかに思われたが、インドとしては外交バランスを崩すことなく対中国政策の基本方針には変化はない。中国の『一帯一路』構想には、日本もインドも対抗する意思はなく、わが国の推進する『自由で開かれたインド太平洋』構想とインドの推進する『Act East』構想を融合させながら、市場経済と連結性を一段と推進し、アジア太平洋地域とインド洋地域の協力を進めたいというのが両国政府の意向であった。
- 来年のインドの内政については、5 月に行われるインド総選挙への準備にモディ首相や与党・インド人民党（BJP）が奔走しそうである。この 12 月にはイスラム教が強い大州の選挙があり、この去就でモディ政権が大きな影響を受けそうであるが、いずれにしても総選挙での BJP による単独過半数獲得は難しかろうとの予測の中、各政党間の政治力学が働いていきそうである（編集部注：その後の開票の結果、5 州のうちマディヤ・プラデシュ、ラージャスターン、チャティスガールの各州で BJP はライバルの国民会議派に敗れ、州政権を譲ることとなった。また、テランガナ及びミゾラム各州では地方政党が勝利した）。

- 滝崎部長に対し多くの質問があったが、第三国（具体的にはアフリカ）との関係で日印協調は如何かとの質問に対し、部長より、両国が想定するインド太平洋構想にはアフリカも含まれており、アフリカでのインド人ネットワークの活用と民間企業の協力体制を築きながら積極的に進めたいとのことであった。

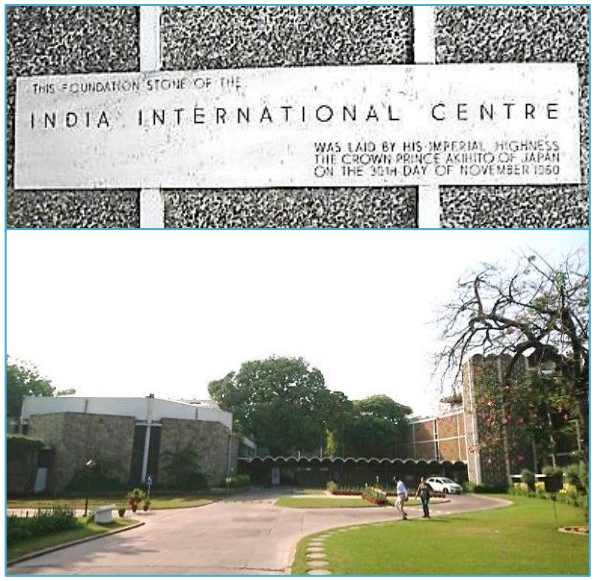
2. 精神的な絆から「特別戦略的･グローバル･パートナーシップ」へ
—日印関係の将来をインドで語る—
Unearthing Japan-India History from Spiritual Affinity to the Special, Strategic and Global Partnership

日印協会 理事長　平林博

11 月 13 日から 17 日まで、デリーとアーメダバードを訪問しました。

デリーでは、11 月 15~17 日まで、わが文部省（現在では文部科学省）が毎年招聘してきたインド人留学生の OB/OG 会である MOSAI（Mombusho Scholars Association of India）が創立 50 周年を記念し開催したシンポジウムで基調演説を行いました。これには、わが国の駐インド大使館、在デリー国際交流基金事務所、インド側はデリー大学が支援しました。特に、MOSAI の創設以来の会長であるアショック・ジェイン氏は、50 年の節目を飾る行事として準備の段階から全身全霊を傾けていました。

会場は、デリーにおいてトップレベルの知的指導層、元高級官僚・軍人、各方面の文化指導者が集う知的センターIndia International Centre でした。ここは六本木にある国際文化会館を模して創設され、今上天皇・皇后陛下が皇太子・同妃殿下時代の 1960 年に訪印された際に礎石を置かれた、わが国と特別な関係のある場所です。両陛下は、2013 年のインドへの公式訪問の際にも立ち寄られました。



〈写真上：India International Center（IIC）の
今上天皇が皇太子時代に定礎した礎石、下：IIC 外観〉

今回のシンポジウムは、タイトル「India-Japan: Unearthing Lesser-known Linkages」が示すように、日印間の文化・芸術・学術交流の歴史の中であまり知られていない、各分野での交流と協力の歴史を「掘り起こし」、交流の幅の広さと深さを回顧するとともに、今後の展望を開こうとの趣旨でした。よく知られているような仏教やインド哲学に関する学術交流や岡倉天心・横山大観などとタゴールとの交流はもちろん、それ以外の考古学などの学術交流、音楽・舞踊、織物などの研究に従事してきた日印双方の学者や研究者、さらには台湾・シンガポール・英国からの参加もあり、筆者としては改めて日印交流の長く広範な歴史に強く印象付けられた次第です。

〈シンポジウムの様子〉

歴代の駐日インド大使アルジュン・アスラニ、アフタブ・セット、ディーパ・ワドワの各氏が各セッションのモデレーターやプレゼンターとして積極的に参加され、それぞれの時代の日印交流を回顧していました。

私は、「Unearthing Japan-India History from Spiritual Affinity to the Special, Strategic and Global Partnership」と題して、まず日印の交流の歴史における仏教の大きな役割、さらに東寺の講堂や三十三間堂に見られるようにヒンドゥー教の神々がわが国では如来や菩薩の守護神となっていることを紹介し、精神的絆の深さを強調しました。次いで、明治期以来の大きな里程標を回顧しました。明治の後期には、日印協会創設（1903年）、岡倉天心・横山大観などと詩人タゴールとの交流、大正期から第二次大戦に至る時期には、わが国によるインド独立運動への支援（日本に亡命してきたビハリ・ボース、次いでチャンドラ・ボースなどがインド国民軍や独立連盟を創設した際の支援）、インド国民軍のインパール作戦参加など、わが国がインドの独立に大きな支援を行ったことを紹介しました。

戦後の日印関係においては、1948年の極東軍事裁判でのパール判事による日本に好意的な少数意見、1949年のネルー首相による仔象インディラの上野動物園への寄贈、1952年の国交樹立、1989年の昭和天皇の「大喪の礼」に際してインドが宣言した3日間の国喪など、わが国に対する好意や配慮に満ちた対応を紹介しました。他方、1991年の第1次湾岸戦争を契機としたインドの外貨危機に際しては、国際通貨基金（IMF）に先立ってわが国が外貨の緊急融資を行うことによりインドを助けた逸話などを披露しました。

しかし、筆者が駐インド大使として赴任して2か月後の1998年5月、インドは核実験を強行し、日印関係は大きく後退しました。インドは、わが国を含む国際社会から抗議や政府開発援助（ODA）の停止などの制裁を受けました。以後、2年間、筆者は日印関係の修復に努力することになりましたが、2000年8月にようやく努力が報われることになりました。現職総理大臣として10年ぶりに森喜朗総理（現在日印協会会長）が訪印し、バジパイ首相と共に「21世紀の日印グローバル・パートナーシップ」を宣言しました。翌2001年にはODAが全面的に再開され、関係は正常化されました。同年、バジパイ首相はわが国への公式訪問を行い、小泉純一郎首相との首脳会談を行いましたが、同行した筆者には感慨深いものがありました。

その後双方の政府により、この関係は2006年に「戦略的グローバル・パートナーシップ」へ、さらに2014年に「特別・戦略的・グローバル・パートナーシップ」へと、形容詞が3個も付いた世界の二国間関係では珍しい特別な関係にアップ・グレードされました。筆者は、これ等の経緯を、駐インド大使及び日印協会理事長として経験し見聞したままに披露し、日印関係が加速度的に発展しつつあることを聴衆に印象付けるようにしました。

さらに、ここ数年来の発展著しい日印両国政府による大型プロジェクトと日本企業の対印投資状況を紹介しました。デリーとムンバイ間の産業大動脈構想（DMIC）の進展、同じ区間の貨物専用線（DFC）の進展、ベンガルール（旧称バンガロール）とチェンナイ間の産業大動脈構想（CBIC）の調査、さらに最近正式に発足したムンバイ・アーメダバード間の新幹線計画の起工式や東北インド開発計画の発足など、日印双方が官民挙げて取り掛かる大型プロジェクト、筆者も関係したわが国のODAによるデリー・メトロの成功に触発されてインドの地方都市で急速に進捗している大都市メトロ計画などを紹介しました。対印投資面では、インドは、毎年行われている日本の国際協力銀行（JBIC）の調査で将来の投資先第1位となってきたこと（今年の調査では第2位）、インド各地へのわが国企業の進出状況（現在は1300社強）を紹介しました。

〈インド外務省にてSanjay K. Verma外務省局長（右）と平林理事長（左）〉

現在のインドは、各地で経済発展が著しく、特に大都市郊外の高層ビルの林立ぶりは目覚ましいのにも関わらず、インドについての日本人の理解は、このような発展に追い付いていないというのが筆者の印象です。時に、改革志向のモディ首相により、インドが「Make India、Skill India, Green and Clean India」などのキャッチフレーズの下で急速に近代化しつつあるインドへのイメージは変える必要があると考えています。

また、筆者は、安倍総理が唱えてきた「インド太平洋戦略（ないしヴィジョン）」とモディ首相の唱える「Act East（東方政策）」が協調しながら発展しつつあり、太平洋とインド洋を平和と繁栄の海にしようとしていることを双方の国民にもっと理解してほしいと願っていることを紹介しました。最近両国は、この日印協力関係をアフリカまで延長し、インド太平洋とアフリカを結ぶ産業大動脈を築

き上げることを目的として、日印の協力でアフリカ支援を行うとの戦略に発展していることは、真の意味でのグローバル・パートナーシップであると考えています。

ただし、最後に筆者は、人と人との交流の規模（学者・研究者や文化人の交流、インド在留邦人や在日インド人、双方の留学生や観光客など)、日本語学習者数、地方公共団体間の姉妹都市などの交流数、日印間の航空便数などを、日中間のそれと比較すると一桁違うほど大きく水をあけられていることを紹介しました。その中で強調したのは、日印間の人的交流はまだまだ不十分であり、換言すれば将来の可能性が大きいということになるということです。

なお、ワドワ元駐日大使の配慮により、急遽、チノイ大使の後任として次期駐日大使に指名されたSanjay Kumar Verma 外務省局長をインド外務省に往訪し（写真は前頁)、歓談しました。同大使は、とても親しみやすい方ですが、わが国は初めての経験だというので、筆者をはじめとする日印協会は全面的に支援すること、できるだけ早く日印協会主催で歓迎レセプションを行うことを伝え、感謝されました。

・・

〈中央左側が Mukesh Patel 会長〉

グジャラート州のアーメダバードは、筆者にとって駐インド大使として公式訪問して以来 18 年ぶりですが、その発展ぶりは聞いていた通りの立派なものでした。

今回は、過日、日印協会が協力のために署名した覚書に従い、アーメダバード印日友好協会（India-Japan Friendship Association of Ahmedabad、Mukesh Patel 会長）の要請に応じて、現地で記者会見や講演を行うことが目的でした。この協会は、アーメダバードの知的学術的施設が集まった一角にある Ahmedabad Management Administration と称する立派な建物の中にありました。その中には、印日センター（India-Japan Centre）があり、図書館、日本語学校、各種の文化活動の拠点となっています。昨年、安倍総理がモディ首相の招待でアーメダバードを訪問した際にかつて見ないほどの大歓迎を受けましたが、安倍昭恵夫人はこのセンターを訪問されました。

講演では、「India, the Last Superpower, and Promising Japan-India Relationship」と題して行いました。こちらの方は、日印関係の過去を辿るとともに、「最後の超大国インド：元大使が見た親日国のすべて」（日経 BP 社）と題した拙書で主張したことを要約して紹介しました。筆者は、あと 20~30 年すればインドは主要国の地位から発展して超大国になる、インドの後には超大国は出ない（したがって「最後の超大国」）と考えていますが、そう考える根拠、超大国への道筋に横たわるインドの課題、超大国としての責任等につき私見を紹介しました。これまで拙書のことを聞いたインドの人々は、特にタイトルにびっくりしたり喜んだりします。しかし、これは単なる追従や過大評価ではなく、インドがまじめに内外の課題に取り組んでいけばそうなるだけの力（面積や人口の大きさ、国際的影響力、核抑止力を含む自主独立を保障する軍事力、平和主義と民主主義の伝統、紀元前の 4 大文明以来の豊かで多様な文化いわばソフトパワーとその海外への影響など）があること、ただし国造りや人づくりに一層の努力をすること、その際にカースト差別や格差是正などへ真剣に取り組む必要があることなどを率直に述べました。

〈講演の案内ポスター〉

今回の訪問は、IIC でのシンポジウムを抜け出した日帰りのものですが、垣間見た街の様子は道路、水道、電力などのインフラ、学術機関の多さなど大変印象深いものでした。インドの中でいくつか計画されている高速鉄道の中で先行しているムンバイとアーメダバード間を結ぶ新幹線の始発駅がアーメダバードになることにつき、あらためて理解が深まった感がしました。モディ首相が州首相時代に始めた多くのプロジェクトが実りつつあります。私見では、モディ首相はグジャラート州での成功体験を、インドの首相としてインド全土に広げようと思っているのではないかと感じました。変わらないのは、ガンジー・アシュラム（住居兼道場）と郊外にある 500 年近く前に建設された階段井戸（Step Well, ユネスコ世界遺産）程度のものかとも思われました。

〈ガンジー・アシュラムにある、ガンジー像（Wikimedia）〉

〈ユネスコ世界遺産の階段井戸
（理事長撮影）〉

ちなみに、グジャラート州の州都はアーメダバードではなく、北に展開するガンジナガルですが、そこは近代的な政治・行政都市となっています。今回は時間の関係で寄れませんでしたが、いつか日本企業が盛んに投資している州の南部とともに訪れたいものだと思った次第です。

3. アッサム州の舞踊団を迎えて
The First Dance Team Delegation from Assam

NPO 法人日印交流を盛り上げる会　代表　長谷川時夫　個人会員

今年 26 回目となる「ナマステ・インディア 2018」にインド政府 ICCR（インド文化交流評議会）は、アッサム州のサマネイ・クシェトラ舞踊楽団を派遣しました。ナマステ・インディアには毎年ステージの目玉となるインドからの舞踊･音楽グループが登場してまいりましたが､私の知る限りアッサムから日本に舞踊団がきたのは初めてだと思います。この舞踊団は 15 名編成で団長のスリムティ・レカ・ボラ・サイキヤ女史と妹さんのムミトラ・ロハングさんが率いるグループで、9 月 18 日成田経由で仙台空港に到着、10 月 9 日名古屋国際空港から帰国するまでに東京の他、9 県 10 市町で 12 公演をしました。

アッサムと言えば世界最大の紅茶の産地です。1823 年イギリス人ロバート･ブルースがアッサムに自生する野生の茶樹を発見したことが、アッサムでの茶栽培のきっかけとなりました。茶の栽培が大きく発展する中で、多くの労働者が集められ、アッサムは多くの異なる少数民族の人々が住む場所となりました。

アッサム語で「サマネイ」とは「絆」を意味し、サマネイ・クシェトラ舞踊楽団はインド北東部の様々な部族やその伝統文化を継承することを目的に、2002 年に発足し、民族舞踊や音楽を通じて部族間の融和と友好交流を促進し、海外にもインドの少数派部族の文化を発信するために、勢力的に活動しています。来日した 15 名のメンバーは 7～8 の民族グループの出身でした。

ある時、楽しげに歓談する男性たちに混じって私が即興で唄を歌うと手拍子や踊りまで出始めました。私はアジアのプロの音楽家をバックに実験的な音楽をすることができました。この舞踊団は団長と妹さんを除いて 6 名の女性達が基本的に踊ります。演目の変わり目に相互に衣装替えしていました。

この舞踊団が日本に来ることが確定したのは、来日の 1 ヶ月 10 日前。日本の文化施設等は基本的に 1 年前に予算が決まっていますので、急な話に対応できません。そうした日印の時間に対する考えを乗り越え、文化交流を良い形で実現させるのは、大変難しいことです。

しかし、国際交流には楽しいこともたくさん起きます。例えば､「日本に行くときに何か持って行くものがないか」と団長が気を遣って事前に電話してきました。私は早速､「納豆を持ってきてほしい」と答えました｡納豆とは何かを説明するのですが、なかなか理解してもらえません。そこでマニプール州では「ハワイジャン」と言うと説明をして、ようやく理解して貰うと電話の向こうで大笑いされました｡「どのくらい持っていけばいいのか？」と聞かれたので、たくさん持ってきてほしいと答えました。空港に迎えに行くと、早速荷物の中から納豆（アッサムでは Akhuni や Hidol と呼ばれている）を取りだしましたが、臭いが強烈でした。このときの団長の笑い声と笑顔でその後のハードな公演を最後まで乗り切ることができました。講演の成功は納豆のお陰だったと思います。

＜アッサム納豆＞

昨年のナマステ・インディアに派遣されたラダックのグループも納豆を持ってきてくれました。日本文化のルーツを考えるとき、南中国の広西壮族自治区、雲南省、貴州省に住む 32 を超える少数民族は日本との多くの類似点があると言われています。もちろん納豆もですが、もう一つは稲作です。アッサム・雲南が起源だと言われています。

1983 年に調査のために広西から雲南に入ったことがあります。1986 年日本全国で、広西博物館に展示されていた 12 の広西少数民族の織り布と楽器の展覧会を開催しました。その時、共同研究の代表だった私は、研究者があまりやらない事柄を選んで現地調査をしました。その一つが、米が出来はじめてから収穫まで米の近くでは大きな音を出してはいけないという事。銅鼓（ドウコ）、芦笙（ロショウ）という少数民族の魂に関わる楽器は吹いてはならない。何故かと理由を聞いても分からないといいます。そこで、現地の行政官や学者の方々にも聞いたのですが、一週間程度の調査では分かりません。後で調べると、インドのアッサム地方では、稲の周りで子

供たちが大きな音をたてると怒られるという記述がありました。どうも少数民族の間で「稲の生育と出産が結び付いていて、大きな音によってその魂が落ちてしまう」と伝播されたのではないかと思い至りました。

アッサムの音楽や踊りを見ていると日本文化に大変共通する文化があります。日印の交流を考えたとき、インド北東地方はこれから重要な地域となっていきます。今回の舞踊団のような方々が日本各地に行き、交流をしていくのは大変意義のあるものだったと思っています。持ってきた納豆は山形県酒田市や秋田県横手市でも皆さんに食べてもらいました。3日目の仙台市ではカビが出始めていたのでやめました。その臭いが大変強烈で、みんなの笑いを誘い、公演前の少しギスギスした関係を和らげるのに納豆が一役買ったと思います。納豆は同じアジアの文化要素だと思います。日本は明治開国以来、欧米の後追いをいまだにしていると感じますが、そろそろ日本の色濃い文化を世界に発信していくべきだと思います。そのようなことを考えるときに、アッサムに長く伝えられてきた文化遺産は貴重であり、多くの示唆を与えてくれると思います。

ここに写真とともに、プログラムの一部を紹介します。

ビフ・ダンス

ビフはアッサムの人々が季節や気候の変化を謙虚に受け入れる心を意味します。ビフ祭は年に3回、季節ごとに開催されます。1月の「ボーガリ・ビフ」は大地の恵みに感謝するお祭りです。4月の「ボハグ・ビフ」はアッサム地方の正月を祝うもので、最も盛大に行われるもので、若い男女が豊作を願って「ビフ・ダンス」を踊ります。10月の「コンガリ・ビフ」は食糧を節約しなければならない冬季を迎えるお祭りで、アニミズム的な要素が強いのが特徴です。

ジュームール・ダンス

紅茶で世界的に有名なアッサムに住む人々の多くは茶農家として暮らしています。彼らはアッサム語を公用語として話しますが、独自の文化と言語を確立しています。茶農業で生計を立てている部族の多くは、もともとイギリス植民地時代に、他の地方から茶農園で働くためにイギリス人によって連行され、そのままアッサム地方に定住しました。インドの様々な地方の伝統芸能や信仰とアッサムの文化を織り交ぜた、「ジュームール」と呼ばれる陽気な舞踊と歌謡です。

ハジョング・ダンス

ハジョング族はメーガーラヤ州の中で4番目に人口が多い部族です。ハジョング族は主にバングラデシュ国境付近のメーガーラヤ州のカーシ山岳地帯に居住していますが、アッサム州のドゥブリ地方、ゴアルパラ地方、デーマジ地方等やアルナーチャル・プラデーシュ州にもいます。織物が得意なハジョング族の女性は「パシン」や「プーラ・アゴン」と呼ばれる鮮やかな縞模様が特徴的な赤色のドレスを自作しています。

4. インドニュース(2018 年 11 月)
News from India

1. 内政

【連邦政府/連邦議会】

11月1日：ラーフル・ガンディー・コングレス党総裁とナイドゥ・アンドラ・プラデシュ（ＡＰ）州首相（テルグ・デサム党（ＴＤＰ）党首）はデリーにおいて会談し、会談後の共同記者会見で、ＢＪＰを打倒するために連合して戦うことに合意したと述べた。

11月14日：政府筋は、議会委員会が冬期国会を12月11日から来年1月8日にかけて開催するよう推奨した旨述べた。

11月28日：財務省関係者は、来年度暫定予算案を2月1日に発表すると述べた。本予算案は次期下院総選挙前の最後の予算案となる。

【マディヤ・プラデシュ州】

11月16日：モディ首相は、州議会選挙のための演説で、「4世代」に亘るネルー・ガンディー家によるパフォーマンスと、「チャイワラ（かつてチャイ売りであったモディ首相のことを指す）による4年間」のパフォーマンスを対決する準備ができていると述べ、モディ政権は、55年に亘るコングレス党政権が達成できなかった貧困層による銀行、電力等の利用を可能にしたと述べたほか、コングレス党はMP州におけるＢＪＰ政権のパフォーマンスを説明するよう求めているが、同党は50年間に亘る統治下で同州のために何をしたのか説明するべきだと述べた。

ラーフル・ガンディー・コングレス党総裁は、州議会選挙のための演説で、旧高額紙幣廃止をインド独立史上最も酷い詐欺（the biggest scam）としてモディ首相を批判した。

11月20日：スワラージ外相は、インドールでの州議会選挙運動イベントのサイドラインで、次期下院総選挙に出馬しない旨報道陣に述べた。

11月21日：マンモハン・シン前首相は、民主主義を弱めているとしてモディ政権を批判した。

【ミゾラム州】

11月23日：モディ首相は、アイゾールにおける選挙演説で、コングレス党はＢＪＰが政権を握ることで北東部の文化を侵略しているとするデマを拡散している、コングレス党が人々を分断することで統治しようとしているとして批判した。

【テランガナ州】

11月27日：モディ首相はニザマバードにおける選挙演説で、コングレス党とテランガナ民族会議（ＴＲＳ）はどちらも家族運営の政党であり、州の発展に寄与しないとして批判した。

2. 経済

【インド経済（2018 年度第 2 四半期のＧＤＰ成長率）】

11 月 30 日：インド政府統計・計画実施省（MOＳＰＩ）傘下の中央統計局（ＣＳＯ）は、2018 年度第 2 四半期（2018 年 7 月～9 月）のＧＤＰ成長率を発表したところ、概要以下のとおり。

- 2018 年度第 2 四半期の実質ＧＤＰ成長率（前年同期比）は、前期（第 1 四半期）の 8.2%から減速して 7.1%となった。
- 産業別では、農林水産業の減速に加え、鉱業がマイナス成長に転じたことや製造業の伸び率が大きく鈍化したことが、支出面では、民間消費の伸び悩みや、純輸入の拡大などがマイナスに働いた。

メモ：上半期（2018年4月～9月）の経済成長率
○実質ＧＤＰ成長率　7.6%（前年同期は6.0%）

3. 外交

【世界銀行】

11 月 2 日：モディ首相はジム・ヨン・キム世界銀行総裁と電話会談を行った。

【印・韓国関係】

11月4日－7日：モディ首相からの招待を受け金正淑（キム・ジョンスク）韓国大統領夫人が訪印し、モディ首相と面会を行ったほか、スワラージ外相による表敬を受けた。

【印シンガポール関係】

11月14日－15日：モディ首相がシンガポールを訪問し、印ＡＳＥＡＮ非公式首脳朝食会、第13回東アジア首脳会議（ＥＡＳ）、第2回ＲＣＥＰ首脳会合に出席し、ＥＡＳのサイドラインでリー・シェンロン星首相と会談したほか、ペンス米副大統領、スコット・モリソン豪首相、プラユット泰首相と会談した。

【印ラオス関係】

11 月 22 日－23 日：スワラージ外相はラオスを公式訪問し、サルムサイ・ラオス外務大臣と第 9 回印ラオス共同委員会（9th India-Lao PDR Joint Commission Meeting）の共同議長を務めたほか、合意議事録（Agreed Minutes）が発出された。また、スワラージ外相はトンルン首相を表敬したほか、インド人コミュニティに対して演説した。

【印パキスタン関係】

11 月 23 日：印外務省は、23 日朝に起こったカラチの中国総領事館に対するテロ攻撃を強く非難する旨のプレスリリースを発出した。

【印モルディブ関係】

11 月 17 日：モディ首相はモルディブを訪問し、ソーリフ・モルディブ大統領就任式に出席したほか、ソーリフ大統領との会談の後、共同プレスステートメントが発出された。

11月24日－27日：シャヒード・モルディブ外務大臣がインドを公式訪問した。

メモ：印外務省発表共同プレスステートメント（一部抜粋）

○両首脳は、インドとモルディブ関係の回復力に留意しつつ、ソーリフ大統領がモルディブ大統領に選出されたことで、緊密な協力と友好関係の再開への自信を表明した。

○両首脳は会談中、インド洋における平和と安全を維持することの重要性及び地域安定のため、互いの懸念と願望に留意することにつき一致した。

○両首脳は、地域内外でのテロとの闘いにおける協力の強化に対する揺るぎないコミットメントと支持を表明した。

○モディ首相はソーリフ大統領に対し持続可能な社会経済発展を達成するためにモルディブを支援するとのインドの確固たるコミットメントをソーリフ大統領に保証した。

○モディ首相はソーリフ大統領に対し、早期のインドへの公式訪問の招待を行った。　ソーリフ大統領は喜んで同招待を受け入れた。

○ソーリフ大統領は、近いうちにモディ首相がモルディブを公式訪問することを希望した。モディ首相は同招待を受け入れた。

【G20 サミット】

11月29日－12月1日：モディ首相はG20サミットのためアルゼンチンを訪問し、同サミットの機会に日米印首脳会合、ＢＲＩＣＳ首脳会合、露印中首脳会談を実施したほか、習近平中国国家主席、マクリ・アルゼンチン大統領、メルケル独首相、マクロン仏大統領、ラマポーザ南ア大統領、トゥスク欧州理事会議長及びユンカー欧州委員会委員長等と会談した。

4. 日印関係

11 月 5 日：印外務省は、サンジェイ・クマール・ヴァルマ官房・サイバー外交担当次官補が次期駐日大使に任命された旨のプレスリリースを発出した。

11 月 15 日：シンガポールで日米豪印協議が開催された。

今月の注目点：日米印首脳会合（概要）

G20 サミット出席のためアルゼンチン訪問中の安倍晋三内閣総理大臣は、11 月 30 日 14 時 35 分頃（現地時間、日本時間 1 日 2 時 35 分頃）から約 30 分間、ドナルド・トランプ米国大統領、及びナレンドラ・モディ・インド首相と、初の日米印首脳会合を行いました。

今般の会合では、自由、民主主義、法の支配といった基本的価値と戦略的利益を共有しインド太平洋におけるパートナーである日米印 3 か国の首脳が初めて一堂に会し、地域情勢や安全保障に関する共通の関心事項について率直に意見交換を行いました。

3 か国首脳は、3 か国の協力がインド太平洋地域の安定と繁栄にとって極めて重要な意義を有することを確認し、特に海洋安全保障や地域連結性強化の分野において協力を強化していくことで一致しました。

＜G20 サミットにおいて、初の日米印首脳会合が行われた（インド首相府 HP より）＞

5. イベント紹介
Japan-India Events

◇ 最近のイベント ◇

◆ チノイ駐日インド大使を送る

駐日インド大使館のスジャン・チノイ大使が、3年間の日本勤務を終えられ、今般帰任されました。在日インド商工協会と日印経済委員会の共催、日印協会の後援で、11月15日（木）、ホテルオークラ東京にて多くの政財界人とインドビジネスに深く関る方々を招き、開催されました。チノイ大使は3年間の日本滞在で、特に政治、経済面にて大きな実績を残されました。大使は、日本各地を回られ良い思い出が沢山あるとお別れの言葉で仰っておりました。また、インド・モディ首相の公式訪問に2度立ち会われ、その手腕を遺憾なく発揮され、日本企業のインドを取巻く経済活動での、その効果は絶大であったと高く評価されました。日印友好議連会長の細田博之衆議員議員始めとする多く議員や経済界からも駐在期間中の同大使の功績に熱い賛辞と別れを惜しむ声がありました。また、森喜朗 日印協会会長とは固い抱擁を交わされました。

＜チノイ大使を中心に左に森会長、比良理事、右に日印友好議連の面々＞

さらに、日印協会主催で、限定された参加者で極めて小規模でしたが、同大使の歓送会を11月26日に開催し、同大使への慰労と感謝の気持を表しました。

（写真提供：HMI 株式会社　本文：日印協会 常務理事 笹田勝義）

◆ インド大使館後援 ハリウッド大学院大学&ジヴァ・アーユルヴェーダ共催シンポジウムに参加しました！

11月23日に六本木ヒルズのハリウッドホールで「ホリスティック医学とアーユルヴェーダの融合～美容と健康の最先端トータルシステムを目指して」と題して4名のお医者さまから熱いお話を伺いました。参加者は医師やアーユルヴェーダセラピスト、美容関係者など75名ほどでした。

降矢英成先生（赤坂溜池クリニック院長）からは、ホリスティック医学を興味深く説明して頂きました。

インドから来日しているアーユルヴェーダ医師のDr.パルタップ・チョハンからは、世界最大のアーユルヴェーダ･テレメディスンセンターや最先端テクノロージーを駆使したアーユヴェーダ治療の紹介をして頂きました。

御川安仁先生（ナチュラルアートクリニック院長）からは「アーユルヴェーダの美容・現代医療への応用」、上馬塲和夫先生（ハリウッド大学院大学教授）からは、私の一番の関心事、「美しく老いる」ための東西医学融合プログラムやそれを行う施設のお話を伺いました。先生方のお話が面白く4時間があっという間でした。

（写真提供：ジヴァ・ジャパン　本文：日印協会 山本真里枝）

日印協会からの重要なお知らせ

新駐日インド大使　Mr. Sanjay Kumar Verma 歓迎レセプションのご案内

Mr. Sujan R. Chinoy 大使は、離任され、近々、新大使として Mr. Sanjay Kumar Verma が着任の予定です。つきましては、日印協会主催にて、歓迎レセプションを下記にて開催いたします。

日時：2019 年 1 月 18 日（金）　12:00～14:00（受付開始、11：30　）
場所：国際文化会館　東京都港区六本木 5-11-16
会費：同封のチラシをご参照下さい
主催：公益財団法人　日印協会

詳細は、同封のチラシをご参照下さい。

＜今後のイベント＞

◆　インド映画「バジュランギおじさんと、小さな迷子」全国ロードショー決定！

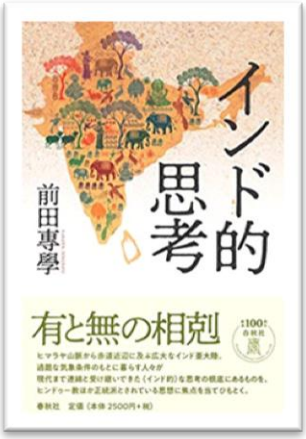
インドの超傑作映画「バジュランギおじさんと、小さな迷子」(2015 年製作)が 2019 年 1 月から全国ロードショーの予定。ボリウッド映画界の人気俳優サルマン・カーン主演、「きっと、うまくいく」のヒロインでお馴染みのカリーナ・カプールが助演、そして何と言ってもこの映画の主人公は純真無垢な少女です。

歌って踊るインド映画の伝統的特長を有しながら、怒って喜び、笑って泣かせる優れた文芸作品。インド映画のファンならずとも全ての映画ファン必見の傑作です。

「PK」でも考えさせられたところですが、インド映画の「神様」の扱いは日本人には真似できないところがあると思います。笑いながらも深くて笑えない不思議な世界を醸し出してくれます。大都会と地方都市、田園風景、美しいカシミールの風景を楽しめるし、法律や制度に縛られて暮らす善良な人々、邪悪な人々、普通の人々、官僚的な人々、うまくかみ合わない現実と理想が面白おかしく描かれています。インド映画の新たな可能性を存分に引き出してくれたお薦めの映画です。2019 年 1 月 18 日新宿ピカデリーを皮切りに全国ロードショー。(文責：日印協会参与　宮原豊)

6.　新刊書紹介
Books Review

§『インド的思考』　ISBN978-4-393-13422-1
著者：前田専學、出版社：春秋社
価格：本体 2,500 円＋税



日印協会顧問でもある、前田專學 東京大学名誉教授は、インド共和国パドマ・シュリを受勲しているインド哲学、仏教学の第一人者です。インドの自然や言語、民族、インド思想の流れを導入とし、現代まで受け継がれてきた「インド的」な思想の根底を紐解く、前田專學氏がいざなう至極の知的な思想の旅。

目次＞序章「インド思想へのいざない」、第二章「人間観」、第三章「業・輪廻・解脱」、第四章「認識論と論理学」、第五章「ことばとその意味、第六章「伝統思想と近代化」、終章「インド思想の根底にあるもの」　(文責：日印協会　主務　玉岡善美)

7. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、2019年1月18日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記> 今月号の「イベント」欄でもご紹介した通り、2019年1月18日より、大ヒットインド映画『バジュランギおじさんと、小さな迷子』が全国ロードショーになります。この映画の原題は『Bajrangi Bhaijaan（バジュランギ・バイジャーン）』です。「バジュランギ」は、ハヌマーンが有する名前の一つで、「バイジャーン」の「バーイー」が兄弟「ジャーン」はDearの意で、Dear Brotherといったニュアンスです。劇中では、主人公がハヌマーンのような正義のヒーローとして描かれています。ハヌマーンは、お猿の顔をした強くて献身的でハッピーな、楽しい神様としてインドの子供たちに大変人気があります。彼らにとって、海外コミックのヒーロー、スーパーマンやスパイダーマンは、ハヌマーンの弟分のような存在なのだそうです。インドの叙事詩「ラーマーヤナ」では、「主人公ラーマを支援し、不死身の活躍をする」（南アジアを知る辞典）ヒーロー的存在ですが、そんな彼の幼少期のとんでもエピソードをご紹介します。ハヌマーンは膨大な力を持った子供として、風神ヴァーユと天女アンジャナーの間に生まれました（南アジアを知る辞典）。ある日、お腹が空いたハヌマーンは、食べ物を探しに出かけますが、空においしそうな果物がなっているのを見つけます。それを「太陽（神）」と知らない純粋無垢なハヌマーンは、食べようとして空を飛び、太陽に近づこうとします。近づくにつれて大きくなる太陽を食べられるように、自分の体を巨大化させ、しまいには口に入れてしまいました。世界が漆黒の闇に包まれます。あわてた神様は、ハヌマーンに罰を与え、太陽はもとどおり。ハヌマーンの手のつけようのない純粋さとその力にあきれ果てた神様は、ハヌマーンの記憶から自身の持つ潜在能力を消し、ただの猿にしてしまいました。以後、ただの猿になってしまったハヌマーンでしたが、ラーマ王子の危機にグル（導師）が彼の記憶を呼び起こします。再び己に目覚めたハヌマーンは、ラーマを窮地から救い出し一件落着。

ハヌマーンの幼少期や、ラーマーヤナの物語までのお話には諸説あるようですが、ここでは、あるインド人が実際に父母から伝えられたお話をご紹介しました。『バジュランギおじさんと、小さな迷子』では、そんなハヌマーンのチャーミングな部分と力強い部分が主人公を通してよく表現されているように思います。ハヌマーンが、ラーマの妃シータを献身的に守りながら国境を超えて送り届ける珍道中を描いたような、そんな心温まる編集子一押しの一本です！

（玉岡 善美）

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、

当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
	学生	１口(4,000円)から		学生 1,000円
	一般法人会員	１口(100,000円)から		法人 5,000円
	特別法人会員	１口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.115 No.10 (2018年12月21日発行) 発行者 平林博 編集者 西本 達生
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/